

第 11 回 横浜市都市美対策審議会政策検討部会議事録	
議題	(1) 今後の都市デザイン行政について ア(仮称)横浜都市デザインビジョンについて(審議)
日時	平成 27 年 3 月 10 日 (火) 午前 10 時 00 分から午前 12 時 00 分まで
開催場所	横浜市庁舎 5 階 関係機関執務室
出席者(敬称略)	委員：西村幸夫(部会長)、国吉直行、佐々木葉、中津秀之、六川勝仁 書記：小山孝篤(都市整備局企画部長)、綱河功(都市整備局都市デザイン室長) 事務局(資料説明者)：野田恒雄(都市整備局都市デザイン室)
欠席者(敬称略)	
開催形態	公開(傍聴者 1 名)
決定事項	・「ア(仮称)横浜都市デザインビジョンについて」は、修正の上、第 118 回横浜市都市美対策審議会審議会で報告する。
議 事	<p>議 事</p> <p>(1) 今後の都市デザイン行政について ア (仮称) 横浜都市デザインビジョンについて (審議)</p> <p>市から資料 1 に基づいて説明を行った。</p> <p>○国吉委員 「暮らしと都市の好循環」とあるが、暮らしというと市民生活というような感じがする。それには来街者に対する役割とか企業活動とかも含まれているのか。「個々の暮らし」という表現で一くくりにしていいのか。「暮らしと活動」くらいにするか。これだけ見ると生活にシフトした時代が変わっていくというような気がするが、これをどう評価するかという感じがした。</p> <p>あと、21 ページのところの 5 つの視点があるが、その最初の「創造性」のところの「創造性のある風景」とはどういうことか。創造性というのが見えるのかというような感じがする。右側の対応したところでも、「先取的な活動や成果を生み出す創造性が求められます」とあるが、創造性を高めるや引き出すなどにつながると良いのではないかと。</p> <p>それから 23 ページのところ、「経済性などが含まれないように見えますが」とあるが、こういうものも含めてトータルでやるのだという感じで、もう少し前向きに書いたほうが良いのではないかと。また、基礎的要素と書かれているが、ここにいきなり出てきて、これは経済性を含んでいるとわかるかどうか。</p> <p>それから 37 ページ以降に「舵取り」という言葉があるのが、「舵取り」が一番行政の中でフィットするのか、市民から見たらどうかという感じがする。「舵取り」というと単に調整役みたいな感じに見えないか。価値を持って引っ張っていくのだというような気持ちもここは出そうとしているのかなと思うと、「先導役」みたいな言葉もあるかなと思う。</p> <p>あと全体的に、(都市デザインの) 次のステップに進むに当たって、都心部の空間づくりというものから取り組んできたものが他要素の活動を包含する都市デザインに変わっていくということをもう少し強く出していったほうが良いのではないかと。最初のほうで「風景」という言葉が非常に強く出てきているが、先ほど言ったような活動をサポートするとか、むしろ活動を醸成するとか、そういうニュアンスが出てきてもいいのかなという感じがした。</p> <p>○西村部会長 先ほどの「暮らし」ということで、もう空間はやらないのか、ソフトに完全にシフトするのかというふうにとられかねないところがある。別章のところでもいろいろなものを書き足しているが、人間が増えて、活動が増えてという感じで、そういうところに力が入っているように見えてしまう。ぱっと見ると、ソフトを応援する、都市デザインというのはそういうふう大きく変わっていったという印象がある。</p> <p>○佐々木委員 確認したいが、「横浜都市デザインビジョン」というのは、横浜の都市デザイン全体の中のどういう位置づけになるのか。例えば歴史を生かしたまちづくりの活動があったり、景観法に基づいたマスタープラン的なことをやっていたりといろいろある中でどうい</p>

う位置づけになるのか。

○綱河書記 この都市デザインビジョンはそういったものもすべて包含している。直接都市デザイン活動で何をするというようなことがここに全部具体名で列記されているようなものではないが、都市デザイン活動というものをすべて包含するというつもりでつくっている。

○佐々木委員 これ（横浜都市デザインビジョン）に該当するようなものというのは過去にはつくられていなかったと考えていいか。

○綱河書記 そのとおり。

○西村部会長 今の質問は多分、何でこのタイミングでこれ（横浜都市デザインビジョン）かということもあると思う。都市デザインというのが総体的でよくわからなくなっているが、やはりこれは非常に大事、単なる一部局の問題ではなくて、都市全体にとって大事ということをお願いということか。

○綱河書記 時代としては次から次へともものづくりがされていくという時代でもない。また、市全体で見れば高齢化とか人口減少とかでまちづくりも大きく変わっていくというようなときに、都市デザインもこれまで培ってきたものを整理して、これからこういうふうな打ち出しをすると表現している。あえて都心部に偏らないように全体でやること、一部の行政やプランナーなどだけが取り組むものではないこと、市民の暮らしのことなどを意識的に強調しているところはある。みんなで（都市横浜を）作り上げていかないと良いまちはできないというようなことをメッセージとして伝えていこうとしている。都市デザインのフィールドも広げていこうという意図もある。

○佐々木委員 提言を出して、その全体を受けてやるときは、こういうビジョンに基づいてやりましょうという考え方をまとめたという理解でいいか。

○綱河書記 そのとおり。提言では今後取り組むテーマなども列挙しているが、それらはもう少し具体的な事業っぽくなっていく。そういうものを事業化していくときの考えのもとになる部分をつくらうということで整理した。

○佐々木委員 個々から始めて、その個々が元気になっていくことが都市全体の元気になっていく、その循環を回していくというアプローチから入っていくということ、その考えに基づいた冊子になっていると思うが、マイクロ最適化の集積がマクロ最適化になるかというところが必ずしもわからなかつたりする。また、このマイクロの活動は既にあるストックの上に乗っかって展開していこうという感じのもので、既に描かれている地形とインフラと建物の上に乗っかってくる活動を描いているということが象徴的にあらわしていると思うが、次のストックをまさに生み出していく、大転換していく視点があまり明確に出ていない。でもそれは今やっておかなければいけない仕事だと思う。それはまた別途あるということ前提として、横浜のアーバンデザインは当面こういうところから入って、活動をエンカレッジしていくためのビジョンという位置づけなら、非常に良いかなと思う。まだ相当ヘビーなインフラをつくっていくこともあるが、そこへの働きかけはやり続けていき、コーディネートをすることによってより効果を全体に高めていくということなどを、次のステップでおさえしておくことが大事かなと思う。

○中津委員 これ（横浜都市デザインビジョン）はすごく思想の本となっている。しかし、そこで終わってしまって良いのか。これは教育上良い読み物でバランスよくできていると思うが、その一方で、高層ビルがどんどん建ってくるというようなことに対して何の反対もできない状況に陥っている。

○佐々木委員 これ（横浜都市デザインビジョン）を持ち出して行って、それらを定められるかということ、ちょっと厳しいという気がする。

○中津委員 このビジョンが本当に生きていけば、（反対するような高層ビルは）次々建たないと思う。そういうところに踏み込まないと、これ（横浜都市デザインビジョン）をうまく使えないのではないかな。市民啓発には良いと思うが、都市美対策審議会もしくは都市デザイン室としての印籠になり得るかということ、ちょっと弱い気がする。

○佐々木委員 それは、この冊子の中にあえて盛り込むか、また別途やるか。

○綱河書記 確かにこれ（横浜都市デザインビジョン）は、個々のいろいろなプロジェクト

にストレートにつながらないというところは承知している。(個々のプロジェクトにつながる
ところは、) 具体的なターゲットを決めてつくる必要があるかなとは思っている。ただ、それをやる
に当たっても、もととなる考え方が必要ということでまとめてきた。

○六川委員 あまり難しく考えないで、横浜の都市デザイン行政は都市デザイン室がしっかり
担っていますよというようなスタンスで良いと思う。過去には歴史的建造物とかみなとみ
らいとかのいろいろな事例があるが、最近うまくいっていない。それを、これ(横浜都市デ
ザインビジョン)がエンジン機能になってデザイン室が動きやすくなり、都市の調和を図る
というような役割をデザイン室がやっていくというようなスタンスであれば、これは非常に
よくまとまっていると思う。写真とかスケッチとか多用してわかりやすくなった。

前にも言ったが、やはり一般市民がわかりやすいものにしてもらいたいと思う。例えばこ
の中で言うと、47 ページとか 48 ページに、行政はこうやって各局と調整するんだというこ
とが書かれているが、そうしたらどうなるというところがない。そういうことをやることによ
って、例えば皆さんの手間が省けるとか、時間も短縮されるとか、もっともっと良い成果
が生まれるとか、もう少し落としどころをちゃんと落としした方が良いかと思う。それで、横
浜の都市デザインというのは非常にハートフルなのだというようなところが表現されれば、
これはこれで良いのかなと思う。

○国吉委員 すべて行政主導でやっていくのではないですよという雰囲気も出てきているわ
けだが、それについてミクロのところの積み重ねだけで良いのか。そういうことから新たな
フレームを築くくらいはしていくとか。たとえば、都心臨海部のフレームづくりの場が、港
湾局とかも市民との議論も踏まえながら提案していく場でもあるとか。

○西村部会長 確かに最初のページ(図)は、個々の暮らしから都市、都市から個々の暮ら
しとなっていて、個々の暮らしを全部受けとめて一つのフレームにして、そしてまた個々の
暮らしに戻していくわけだから、その意味でちゃんとそういうこともやろうということだ
と思う。ただ、個々から出ていって都市に行くというのは割合イメージがわくが、都市の側
から個々の暮らしに行くというところがちょっとわかりにくい。やはりそれは行政とかいろ
いろなところで枠を決めたり、方向を決めたりとかしないといけない。そのところを何か表
現すればいいのではないかなと思う。

それともう一つ、企業、ビジネスも、横浜らしく頑張ることによって、横浜の個性が出て
くるということがある。ビジネスもそういう意味で頑張ってもらいたい。個々の商店が商店街を
つくって、その商店街が都心だけでなくいろいろなところで頑張ればそれぞれが良い地区に
なる。そういうことも含めて個々の暮らしというのを言っているのだとわかるような書き方
をしてくれると、単にそれは個人の居住者だけではないという感じが出てくるかもしれない。

○綱河書記 もともと居住者だけというイメージではなくて、そういう企業活動なども含ん
だものの集合体を都市と考えている。

○六川委員 この写真(P2)では何で元町、中華街、関内、馬車道、伊勢佐木町あたりが入っ
ていないのか。

○綱河書記 なるべく人の活動とかそういうようなものが一体的に見える、なおかつ横浜と
いう風景も一緒に写り込むようなものということで選んだ。都心部ばかりではということで
郊外部も少し入れているが、それ以上写真のセレクトは突き詰めてできていない。

○佐々木委員 だとすると、例えば下の方はアイレベルの人が中心で、上の方は俯瞰的な風
景も入っているかにはしてはどうか。これはあくまでショット、ショットの感じになってし
まっている気がする。面的にやってきた空間の広がりとか、インフラとかを考えて、俯瞰し
てもビジョンがあらわれているような風景も上の方にあって、だんだんアイレベルのもの
があるというように、少しバリエーションを入れても良いかなという気はする。

それから、スケッチの横浜臨海部の絵の、一番高いビルが何だか気になるが、これは新市
庁舎か。

○綱河書記 これは特定のものを指しているわけではない。

○佐々木委員 たとえ超高層であっても、そこにこういう人のアクティビティがある感じ
が積み重なった巨大ストラクチャーであれば良いということか。

- 綱河書記 これは木が生えるといった環境技術とかがデザインにもあらわれているような建物。もちろん活動も書き込んでいるが、そのようなものをイメージして載せている。
- 佐々木委員 やはりそういう活動を含んだメガストラクチャーであれば、横浜を牽引していく、経済とかを牽引していくために必要だということなのか。それとも、そういう活動を内包したとしても、そういう巨大なストラクチャーに依存しないような、まさにアーバンデザインというか、都市計画という考え方に立つのか。これは、人によって考え方が分かれるところだと思う。
- 国吉委員 これ（スケッチの超高層ビル）はやはり非常に象徴的。
- 佐々木委員 象徴的である。しかも全体がつながっているもの（P55）だとさらに高くて、よく見ると風を遮断しているような気がする。
- 綱河書記 いろいろな思いはありつつも、風景のスケッチ自体はあまり厳しい制限、厳密さを求めずに描いているところはある。
- 六川委員 超高層を奨励したような感じになってしまっている。雲の上に出ているのだから。
- 綱河書記 でも、みなとみらいとか、一部では超高層というようなことで考えるところはある。それ以外のエリアでは超高層というような形の表現は出てきていない。
- 中津委員 こういうのは面的なエリアマネジメントにかかわる話で、それはやはりリーダーシップをとって考え方を出さないといけない。生活とか営みとか、この（横浜都市デザインビジョンの）前のほうの空間・営み・感性、この3つをつなげることがエリアマネジメントの基本だが、そのスタンスが全く出ていない。だから空間はこう、営みはこう、感性はこうと短冊型になっていて、面的なマネジメントの感覚、どのように空間と営みと感性をつなげて豊かにしていくかという視点が、この冊子の章立ての中ではうまくは見えていない。14 ページで言っていることがどのように有機的に絡み合っ、場所場所のエリアの特性に合わせて、住民と一緒に考えて具現化していくか。その道筋がわからないということが、ビジョンとしてどうなのだろうと思う。これはスピリッツである。
- 佐々木委員 都市デザインマスタープランというのが別途あるのか。
- 綱河書記 都市デザインマスタープランというものはない。
- 佐々木委員 横浜マスタープランというものはあるのか。
- 綱河書記 全域では都市計画マスタープランがあり、エリアでいくと先日都心臨海部再生マスタープランをつくった。
- 佐々木委員 骨格はそっちで決まっていて、そのの上に乗っかってくるアクティビティーはこっち（横浜都市デザインビジョン）ですよみたいに使われてしまうと良くない。
- 中津委員 だから相乗効果になっていなくて、空間はここに書いてあるのがここにある、営みはここに書いてあるのがここにある、感性はここで…とすると、結果的には1足す1足す1が1.5ぐらになってしまう。それが掛け算になって大きくなっていくような使われ方をするようになるところに踏み込んだらビジョンだろうなという気がする。
- 西村部会長 じゃあどうするかとなると難しい。どうしたら良いか。
- 中津委員 もうちょっと、どのように地域特性を掛け合わすかというような小さなページが入ればいいのかと思う。
- 綱河書記 空間・営み・感性という、13、14ページのあたりでもう少しそこを突っ込んでということか。
- 中津委員 例えばダイアグラムとか。
- 説明者（野田） それは16ページのようなものではないということか。
- 中津委員 これは並んでいるだけになっている。
- 説明者（野田） 今おっしゃっていたことを言いたいページとしてはここになると思う。
- 個々のミクロの集積が、本当に個々の価値観だけで動いてしまうと、それはマクロの最適にはならないが、ビジョンで書いていることを共有した上でのミクロの動きが、実際マクロになってつながっていくと、都市の豊かさになる。逆に、新しく高層がどんどん建ってしまう状況をどうやってとめたらいのかとか、そういった話になるときに、都市デザインなり、

都市デザイン室が、見た目だったり景観だったり、すごく狭義のところは矮小化されていていて、というのがあつた。そのときに、その見た目のところだけでとめようとするというある種短期的なものではなくて、これ（価値観や着眼点）を共有しているまちなのだと表明して、その上で、あなたの土地とその建物も豊かにしたいと思うなら、周りもこれを共有して豊かにしたいと思っているのだから、これ（価値観や着眼点）を共有しませんかというのを、地道に長い時間をかけてやっていくことを前提に、これ（横浜都市デザインビジョン）をつくらうとしている。

本当に今、目の前にあるいろいろな問題にどう取り組むかとか、個々の対策としてはまた別途戦略を組むことになる。

○中津委員 これ（横浜都市デザインビジョン）はこれで一つの作品としても良くできているが、具体的にドライブさせる力になるかどうか。これを読んでいる市民は多分、「市民」と書いてあつても自分のことだと思つて読まない人が多いと思う。例えば、日々悩んでいる、うちの介護老人をどうしようかとか、子どもをだれに預けようかということで悩んでいる人が、「市民」という漢字を見てもそれが自分のことだと思わない。例えば事業者だつたとしても、超高層を建てようとしている人もいたり、中小企業や商店街で悩んでいる人もいたりとか、いろいろ状況があり、主人公は何千種類、何万種類ある。そういう人たちがこれを見たときに、ぐつと自分に引き寄せてくる何かがあつたら足りない。14ページの【営み】とかのところに「働く」とか「住む」とか「商売」とか「観光」とか書いてあるが、例えば働くということに関して、いろいろなパターンで働いている人がいっぱいいるが、それぞれの人が「あ、おれのことだな」と思ふかというのと、多分思わない。同じように、「道」と書いてあつたとしても、道路の人たちが「あ、おれたちのことだ」と思ふかというのと、思わない。

これ（横浜都市デザインビジョン）は非常に理想が高くて、もうちょっと現場に引き寄せる具体的なページやダイアグラム一つか、何かそういうものがあればいいのかなという気がする。後ろのスケッチとかにももうちょっと具体的なことが入つていけばいいのかなという気がする。ちょっと足さないと、住んでいる方も人ごとのように見るかもしれない。これ（横浜都市デザインビジョン）を引き寄せて自分の活動にプラスアルファしていくのはよほど元気な人で、違う人たちにとってどうか。

○説明者（野田） 引き寄せたいというのはそのとおりで、できる限りの人に訴求させたいという思いがある。

○国吉委員 あと、都市デザイン室の都市デザイン活動はそんなに細かく位置づけない。位置づけ過ぎるとかえつてがんじがらめになってしまう。だから、エリアマネジメントというような具体的な言葉を使うと、その言葉が古くなつたときにまた使えなくなるとかがあるのだから、あまり細かく言い過ぎないで、でも他につながるような、他とリンクしてやっていくというのが見える表現というのがあつたのではないかという感じがした。

○六川委員 読み取り方によって違ふと思うが、P47とかP48には書かれてある。さっき言ったように、具体的にこういう形でデザイン室と一緒に取り組むとこういうメリットがあるというようなことがわかりやすければ、興味を持って読んでもらえると思う。例えば馬車道のまちづくりなどはデザイン室がうまくやっていった経緯があるが、そういう具体的などこかの例をいくつか引つ張つてくると、読む方はより現実味が出てくるのではないか。文章で書いてしまつているから読み取りにくいところはあるが、（横浜都市デザインビジョンは）比較的網羅されている。

○説明者（野田） それは参考資料1-3の実績概要資料の一番裏面に載せてある馬車道を例とした都市デザイン活動の多面的展開というもののか。

○六川委員 こういうのがあるとわかりやすい。うちはこういうところを使えるから使つてみようとか。あるいは例えば山手の文教地区だつたらこういうのを参考にしながらこういうところを使つてみようとか。

○佐々木委員 例えばだが、空間から始めて個々に（風景を）つくる活動を始めていって、その結果それを支えるような土地利用計画とかマスタープランに反映されていくとか。営みから始めたこういうビジネス、こういう活動をしたいということや、感性から始めたいろいろ

るな文化活動とかが、ベーシックな行政がやっているハードの計画とか方針とかに、どこかで最後はつながっていくみたいなことをうっすら書けないか。

みんながやるというのは、これを読んでほしい人への訴えかけで良いのだけれども、その結果としてちゃんとマスタープランにもそれと整合性を持つようなやり方をするとか、インフラのつくり方をするとか、産業にしても横浜市らしい産業をエンカレッジするとか、助け合ったりできるような福祉施策、子育て施策もやっていくとか、ちょっと書き入れられないか。

○中津委員 究極は、その先にはいろいろな部局につながっていくようなイメージ。その真ん中に都市デザインがあるというような絵になった方がわかりやすい。空間・営み・感性ということにはならないかもしれないが。

それと都市デザインというものがつながることの道筋がわかれば良くて、その間にいろいろな主人公が点在している。自分も見れば、「あ、おれはここにいるな」というのがわかるようなマインドマップ的なダイアグラムがあると良いのではないか。

○西村部会長 いずれにしても文章をいじるのはもうここまでやっている。イラストがないページもあり、イラストの性格もかなりいろいろあるので、そのところをうまくいじることで、言い切れていないところを何か表現できないかということだろう。

○六川委員 今の部分というのはここ（参考資料）でけっこう言及されている。

○西村部会長 これ（参考資料）はどう使うのか。

○綱河書記 これまでの都市デザインの話というのは本編の中では全然触れていないので、ホームページなどでは一緒に出しておいて、参照できるようにしておこうと思っている。冊子としては一体になるものではないと思っている。

○西村部会長 それはどこか別の紙で挟んで渡すことはできるというイメージか。

○綱河書記 そのとおり。もう少し詳しいもので青色のパンフレット（都市デザインパンフレット）とかの別の資料もある。

○西村部会長 市民意見募集の中でも、今までの都市デザイン室の成果があまり直接には言及されていないという意見がある。こういうものは、今までここまでやって、こういう問題があるから、次のステップはこうなるというようにやるのが普通だと思うが、これは割合ゼロから書いている。恐らく2ページにたくさん写真があるのは、こういうもので今までの成果をあらわしているということでつけ加えたのだと思うが、その部分がもうちょっと情報としてあると、考えやすいのではないか。これだけだと手がかりがないという感じがする。

○六川委員 こういうの（実績概要資料）がベースにあって、都市デザインビジョンを策定するのだから、ベースがあるというのは貴重である。キーワードもなかなか良い。「都心部の骨格をつくる都市デザイン」とか。

○中津委員 今まで50年間やっていたものをシフトチェンジするという宣言書だと（横浜都市デザインビジョンを）とらえたならば、ある意味市民の意見が入らないトップダウン的なことで都市デザインの看板を掲げてきた横浜市が、住民から上がってくるものを、粘土をこねるようになっていくことを新しい都市デザインの定義として考えるように看板をかけかえる、というような宣言がまずあっていいのかなという気がした。

○佐々木委員 そんな宣言しないだろう。

○中津委員 でも、もう今から大型土木プロジェクトをベースに組み上げていくという考えではない。今、醸造されている地域地域の特性を生かして、全体的に束ねていくにはどうすれば良いかということ、みんなと議論しながらリーダーシップをとっていくという宣言だから、全然6大事業と違う。それをまず宣言して、そこに市民を巻き込む。その土俵に乗ってもらうためには、こういうものをまず検証するページがあった方が良いと思うが、あまりそれを具体的にやると大変なことになる。

○国吉委員 6大事業みたいな高度成長型ではないが、行政としてもやはりサステナブル型の戦略は持つ必要はある。

○中津委員 その戦略の上で、エリアによって反応の仕方が違うから、それぞれ個別に対応していくという話だろう。ビジョンというかわからないが、サステナブルということは当然

ある。

○国吉委員 いや、完全にトップダウン型からこっちに変わるみたいな、そういう極端な言い方ではないと思う。

○中津委員 少なくともそういう大型土木事業ではないものに今時代はシフトして、横浜はそれのトップを走っている。

○佐々木委員 でも、6大事業はたまたま大型土木プロジェクトというようにくくれたかもしれないが、そういう意味でやっていたわけではないと思う。

○中津委員 当時からいろいろ下からの事業はやっている。でも、大きなシフトチェンジを今自分たちがするのだということをきっちりどこかで（表現した方が良い）。

○佐々木委員 いや、してはいけない。

○西村部会長 でも、最初のページが「個々の暮らし」から始まっているというのは、かなり大きな主張だと思う。

○佐々木委員 そうだが。

○説明者（野田） そういう意味では、市民意見募集時にその役割を担っていたのが冒頭の宣言文に当たるようなところで、「都市デザイン活動の日常化を目指します」というのが近かったと思う。だが、都市デザイン活動がこれからこっちにこう変わるという、その発想自体がやはり行政だったり、専門家だったりの目線だという指摘もあった。

パンフ（都市デザインパンフレット）にも年表があるが、萌芽期、発展期というような、いろいろなデザイン活動の時期がある中で、より直接的に都市デザインが暮らしと都市をつなぐのだというところに訴求させていくために、冒頭の宣言文を変えた。

○佐々木委員 だからぜひこの2つの資料（本編と参考資料）を、別冊挟み込みみたいな感じで入れていただきたいと思う。そのときに、レイアウトデザインのテイストの違いというのがどうなのかなというのがある。そうすると本当に、これは過去で、これは未来というメッセージになってしまう。

○中津委員 用語解説の後ろにつけておけばどうか。

○佐々木委員 そういうちょっとかわいいブローシャーになって挟まれているとパーフェクトかなと思う。

○西村部会長 テイストが合っていれば付録で十分だし、用語解説があるよりもこっち（参考資料）の方がはるかに読む人にとっては親切。用語解説と言われても、これこそネット上にあって良い感じである。こういうのがあればこういうことまでやってきたのだけど、今こういうふうに変ってきているというのが市民にもわかるのではないか。

○佐々木委員 ヘッダー、フッター、フォントをそろえて。

○綱河書記 冊子として一体化するという考えがなかったのでテイストを合わせていないが、そこは検討したいと思う。

○中津委員 冊子の中には入らないのか。

○西村部会長 用語解説は切ってしまうのではないかな。

○綱河書記 やはり直接専門家とかではなくて、市民の方にも手に取ってもらいたいというときに、わからない単語がこういう文書の中では壁になってしまうことがあるので、一般的にわかりにくいものは少し解説をつけるということにしている。

○佐々木委員 細かいが、用語解説の87ページの「都心部」が、「一般的には、都心部とは東京都の都心部というが」と。東京都だから都心部、これはちょっと違うのではないかな。この解説自体間違っているのではないかと。

○中津委員 ここ（横浜都市デザインビジョン概要版裏面）に描いてある絵は、こっち（横浜都市デザインビジョン本編）の完全なコピーなのだが、大きさがこれ（A3）であれば、小さくなってわからなくなると思う。線の数が多過ぎる。重要などところのアウトラインがあれば良いはず。

○佐々木委員 これ（横浜都市デザインビジョン概要版）は世の中に出るのか。

○綱河書記 概要版はいろいろ説明をする際に使おうと思う。

○佐々木委員 吹き出しも1個だけになってしまっているのはどうか。

○中津委員 もうちょっと線の数を減らしてシンプルイズして吹き出しみたいなものを増やさないと。多分市民が手にするのはこれの方が多いのではないか。それはちょっともったいないと思う。冊子の方も自由に描けるページと描き込んだページがこうなっているが、これをぱっと見たときに、見た人がどう使ったらいいか、ちょっと書いておいた方が良いのではないか。自由に描き込んでみようとかそういう意味ではなくて。

○西村部会長 普通に見ると何のページかわからない人がいるかもしれない。

○佐々木委員 でもこれは結構効果的で、何もないと全然つまらないが、こうなるとすごくすてきになるなという感じがする。

○中津委員 であれば、初めのページに何もないとつまらないとか、煙だらけでどうこうとか、人が歩けないとかって書いておくとどうか。

○佐々木委員 そこまで書くか。この 100 ページ物を手にする人の数を考えたら、そのぐらいは大丈夫なのではないか。

○綱河書記 ただ、(ページを) めくって気づいてもらえるとは思う。

○佐々木委員 最初「ん？」と思うが、ああ、そういうことかと理解できる。

○西村部会長 中津さんがおっしゃったのは、例えば 1 ページに両方あって見比べられるのもうちょっと良いとか、そういうことか。

○中津委員 何かこの反省点や評価みたいなものをちょっとかわいく書いてあった方が良くかと思っただが。

○綱河書記 当初このスケッチブックで描き込みのないページというのをつけるつもりはなかった。でも、既にいっぱい描き込まれたページがあると、何かこれででき上がっているふうであまり描き込む余地がない。そういう思われ方をしてちょっと想像力が膨らまないの追加した。描き込みのある方のページを想像しながら見ていただくということなので、特に説明はなしでいけるかなと思う。

(都市デザインパンフレット(青パンフ)、都市デザインリーフレットを配布。)先ほど別添の資料集ということで、都市デザインの実績という別刷りがあったが、基本はこの青色のパンフレットを抜粋して概要版としてつくっているもの。(参考資料の)最後に、先ほどの馬車道を例にしたというコラム欄があるが、ここ以外はこの青色のパンフレットからの抜粋という内容になっている。当初これをつけなかったというのは、既に発行しているもっと詳しいPR資料があったから。それで別冊の参考資料という形で外していた。

○西村部会長 これらがセットだったら良いということか。

○綱河書記 テイストは、もちろん全然違うが。

○説明者(野田) あと、それ(都市デザインパンフレット)以外にもこのリーフレットとか、今年度つくろうとしているデザインマップとか、そういうツールがいろいろあるので、それを組み合わせながらビジョンをつくと最初は考えていた。

○西村部会長 そうすると、そういうのがありますみたいな情報がどこかにあってもいいかもしれない。

○国吉委員 これ(都市デザインパンフレット)はネットで見られるのか。

○綱河書記 見られる。

○中津委員 ここ(都市デザインパンフレット)を見ると、この「都市のマネジメント期」というものから、「都市デザイン活動のこれから」になっているが、これは何期になるのか。

○説明者(野田) 例えば日常化期。

○中津委員 都市のマネジメント期が 2000 年から始まっていることに気づいていなかったが、これ(横浜都市デザインビジョン)をもって都市のマネジメント期が始まるのかなと思っていた。だから 10 年ごととかの見直しをする中期計画とかにあるような小さなシフトチェンジではなくて、エンジン載せかえぐらいのいかい変更なのかなと思って話をしていた。(横浜都市デザインビジョンは、)小さな波動の一つなのか。

○説明者(野田) やはり長い都市デザインの活動の中での、これからの 40 年、50 年に相当するものを想定したビジョン。

○中津委員 では、「都市のマネジメント期」というのが 2000 年ごろから始まっているのは、

ちょうど大きなジャンプの準備期間みたいな形か。

○説明者（野田） そう。

○中津委員 そういう絵をこの黄色のところ（都市デザインパンフレットの都市デザインのこれからの箇所）に入れると、これ（横浜都市デザインビジョン）も生きてくるのかなという気がする。

○佐々木委員 種の進化のように、だんだん増えていって、ばらけてわからなくなるので、ここを1回ぎゅっと絞って、ここからの活動を支える、共通する価値観とか、見方とかを、割と少ないワードで集約したという位置づけだろう。

○綱河書記 別冊の資料について、これまでの実績というところでもあるので、こういうものと一緒に手に取ってもらえるようにつくっていききたいと思う。内容としてほぼ重複しているものなので、こちら（別冊の参考資料）は外しておこうかなと思うが、それはよろしいか。

○西村部会長 それがわかるようにどこかに示してもらえれば。

○綱河書記 そうなのが参照できるようにというのは、冊子のほうでも表現したいと思う。

○佐々木委員 可能であれば、この（都市デザインの実績の）エッセンスをここ（横浜都市デザインビジョン）に、同じテイストで入っているといいかなと思う。

○説明者（野田） 見開き1ページぐらいか。

○佐々木委員 いや、見開き1ページではなく、テイストとか雰囲気が違うので。

○中津委員 それだけではなくて、これ（都市デザインの実績）は「横浜」を消したらこのまちでも使えるけど、これはやっぱり横浜のやってきた実績のはず。その延長上にこれ（横浜都市デザインビジョン）が乗っかっているという意味もあると思う。

○綱河書記 直接横浜の地名とかは出していないが、（横浜都市デザインビジョンは）やってきたものをエッセンスとして絞り出してきたもの。これはほかのところでも教科書としては使えるかもしれないが、その都市から根づいたもの（価値観など）は横浜固有のものだろうと思っている。

○西村部会長 そういう意味ではなくて、ほかの日本の自治体で都市デザインをやっている人たちは、これを見て新しい次のステップを学ぶと思う。その意味で大きな普遍性を持っていると褒めているわけである。固有性がないと思わないで、普遍性があると思えば良い。

ただ、白紙のページがあり、デザインのことを言いながらデザインで描き切れていないということ、何か描いてほしいなという感じがする。

○国吉委員 全体の活動のスタンスを、極端に言うとトップダウン型からボトムアップ型に、その領域を広げてやっていくというスタンスは出ている。それも大事だと思うが、一方で、単なる調整役で終わってしまうのかと思う。今までやったことはもう放棄するようで、それに対する信頼感を持っている人たちの期待感が外れるような感じになる。両方に対する何か信頼感を得るというスタンスも必要。

○西村部会長 「舵取り」という言葉が、下手すると単に舵を取っているだけで、オールをこぐのは別の人みたいに思われるので、その辺の注意が言葉に対しても必要になってくる。

○国吉委員 もうちょっと現場、地域に出ていって、あるいはいろいろな領域の人と議論する場にも出ていってやっていくというスタンスを見せつつ、それを受けて自分たちで先導する役割があるのだということも見せてほしいなという感じはある。

○説明者（野田） 個々の暮らし、個々の活動にみんなが取り組みたいと思うときに、あえてその先導というようなニュアンスのものを言っていない。一方で、「舵取り」という言葉に対する意見としては、会社の「舵取り」とか、そういう言い方を社長に対してしたりする表現もあるということで、「舵取り」という言葉を使ったらそう思われてしまうのではないのという方もいるぐらいなので、双方の意見を踏まえるとやはり「舵取り」かなと考えている。

○国吉委員 その流れはあるが、それがひとり歩きしてくると周囲任せみたいな感じになって、もうお任せしましたみたいになっていかないか。経済局などが商店街振興などでコンサルタントを派遣しますとといったことをやると、金を出してコンサルタントを派遣するから、あとは勝手にやってくださいねとなって、行政サイドはもうやらないみたいな雰囲気になっていかないと危惧している。市民まちづくり条例というのをつくって市民に任せるように

なったから、そこにあまり人を割く必要はないということで、安易に省力化されていくというふうなことも幾つか見てきている。あまりそちらだけを主張すると、逆にこちらはおろそかになり、無責任になる可能性もあるという気がする。

○六川委員 内部的な調整の話なのだが、これ（横浜都市デザインビジョン）を策定することによって、都市デザイン室が動きやすくなってもらいたいという期待がある。今、非常に（市役所の部署・業務が）細分化されてしまっていて、何かよくわからない。市民から見てもわからないと思う。これはあっちだから、看板はこっちだからと、みんな細分化されてしまっていて、その人たちが果たしてわかって理解して動いてくれているかなという、異動もあったりしてそうでもない。これを策定することによってその辺もしっかりとバインドできるのかなと思っている。

○説明者（野田） 来年度以降も含めて庁内研修とか、入庁する予定の人たちに向けたものとかをやって、都市デザインに対する理解のある行政スタッフ、もしくは能力のある人たちを増やしていくことで、より円滑になっていくということは取り組みたいと思う。

○国吉委員 理解者を増やすだけであって、大きな構造を変える役割にはならないのではないか。

○綱河書記 デザイン室ももう少し動きやすくなるようにという話があるが、そのためには、具体的なプロジェクトとかの中で都市デザイン室がもう少し全体をつないでいたり、中心的役割を持ったりということを少しでも増やしていかないといけない。いろいろなところで開発のプロジェクトとかもあるので、都市デザイン室としてもこれ（横浜都市デザインビジョン）を体現すべく、率先してやるということで、いろいろな形で実践していきたいと思う。我々の姿勢としてはそんな意気込みということでご理解いただきたい。

○国吉委員 ほかの都市から見ると、（横浜は）都市デザイン事業をやっているというふうに見えるのだが、都市デザイン事業というのはなくて、横浜がずっとやってきたのはコラボレーション。デザイン室は事業を持っていなくて、いろいろな事業をつなぎ合わせてやっている。例えば開港広場周辺は、港湾局の事業と緑政局の事業と道路局の事業を重ね合わせてできた。庁内調整すべきとかそんなことを言うよりも、具体的にこのようにやってこういうものが誕生したという事例をたくさん見せられると良い。

○中津委員 それを見せたい。そういうダイアグラムが必要。

○国吉委員 そういう事例を見せれば、そういうことで新しい価値ができたのだと、庁内のトップの人たちにもわかってもらえるかもしれない。そのようなものをもう少しわかるようにすることが大事。

○中津委員 「舵取り」の定義のページを1ページつくって、こういう事業を載せて、そのためにどういう舵を取ったかという、部局の具体的な名前とかを入れて、ダイアグラム1つ入れてはどうか。それが今までやってきた「舵取り」で、今からもっと違う舵も取っていくという宣言を入れるだけで、大分これ（横浜都市デザインビジョン）の意味が変わってくるような気がする。

○西村部会長 1ページなのか、数行で済むのか、工夫の余地はあると思うが、ポンチ絵があればいいかもしれない。何かいろいろな部局の人が頭を突き合わせて方向性が決まっているような。

○小山書記 そもそもになるが、あくまでもビジョンなので、行政の中での役割、立ち位置みたいなものをこの中で整理していくのは無理がある話だと思う。都市施設全体の考え方やまちづくりの考え方などの横浜市の考え方をこのビジョンの中で描いていくというのも無理があるということだと思っている。六川さんが言われることも十分わかっているが、この中でそこを書いて全庁的に立ち位置を決めてしまうのがビジョンではないだろうと思うので、ちょっと書き方は考えさせていただきたい。

当然のことながら企画部全体が、もしくは都市整備局全体が、まちづくり全体のトータルのコーディネイト役を担うというのは、組織上明記されている話。企画部は企画課とデザイン室を両方持っている部で、ここ（横浜都市デザインビジョン）でわざわざ定義する必要はない。書き方は考えさせていただきたいが、そういう状況はあるということでご理解いただ

きたい。

○国吉委員 過去のカテゴリーを乗り越えて、バッファを外してつくってきたものみたいな感じで、公園だったり道路だったり、垣根を外して新しい価値を生み出してきたとかというのでも少しわかるかと思う。

○中津委員 市民は今いろいろ書かれていることを知らない。それを知ってもらうという意味では、多少具体的に、そういうことをすることによってこういう成果ができているのだと見せて、「舵取り」ということを理解してもらうのは重要だと思う。

○小山書記 過去にこういうことをやってきたと書くことによって、そういうことをやってきたと知らしめるというのはあると思うが、市民からすると行政の中で横につながっているいろいろな調整をしていろいろなものが進んでいるというのは当たり前。

○国吉委員 当たり前かどうかはわからない。

○中津委員 横浜市が特殊なことをやっているということをみんな知っているとは思わない。

○佐々木委員 38 ページのちょうど白紙になっているところに、例えばこの 36 ページに書いてあるような、いろいろな人たちと協議しているとか、どういう方向に向かうかといったイメージイラストみたいなものがあるだけでも違うのではなか。

○西村部会長 「舵取り」のところもあるし、前にも（白紙が）あるので、幾つか入れていくとイメージが伝わるのではないかと思う。

○小山書記 了解。ちょっと考えさせてもらいたい。

○佐々木委員 基本的には非常によくできているからいろいろ言えたわけで、これ（横浜都市デザインビジョン）はすごい力作だと思う。売ると良い。

○中津委員 ちゃんと ISBN とかつけて、ビジネスを考えた方が良いのではないか。教科書として。

○小山書記 横浜市も有料でやっているものと無料でやっているのと 2 種類ある。その辺はまた考えたい。

○国吉委員 47 ページに「海外向けの情報媒体の設置」と書いてあるが、国内も入れておいてもらいたい。海外だけではなく国内も関心を持つので。

○西村部会長 微調整が残ったが、そこはお願いします。

最後の意見を聞いていると、全体としては高い評価があると。よくできているからこそなおさら言いたいのであって。

○佐々木委員 そういう意味では、多分無理かなと思うが、この最後（横浜都市デザインビジョンの奥付）は「都市デザイン室」ではなくて、個人名を挙げておいてもらいたい。それは歴史的に大事。例えば 10 年、20 年後に横浜の都市デザイン史の研究をしようと思ったときに、個人名は欲しい。

○綱河書記 これはこういうものづくり方もあるので、ご意見としていただく。

○西村部会長 微調整は事務局と私の方でやらせていただくということで、また最終的には審議会の方で確認したいと思う。

(2) その他

○綱河書記 最後に確認させていただく。実績については冊子をまた別途つけるということではなくて、こういうところで参照できますということの紹介を載せる。それから、「舵取り」のところ、白紙のページなどを中心に、言葉や写真の入れかえなどができればと思う。

本日の議事録については横浜市の保有する情報の公開に関する条例に基づき、議事録についてはあらかじめ指定した者の確認を得た上で、それを閲覧に供するというものになっているので、議事録については部会長、西村先生の確認を得ることとしたい。

閉 会

資 料	資料 1 : (仮称) 横浜都市デザインビジョンについて 資料 2 : 第 10 回横浜市都市美対策審議会政策検討部会議事録
特記事項	・本日の議事録については、部会長が確認する。